【資料名】萬代塵劫記（那珂郡吉野下村藤井家文書　４７９）
【年代】安政２年秋序
【作成】賞月堂主人
【解説】

まず、「塵劫記」について紹介する。

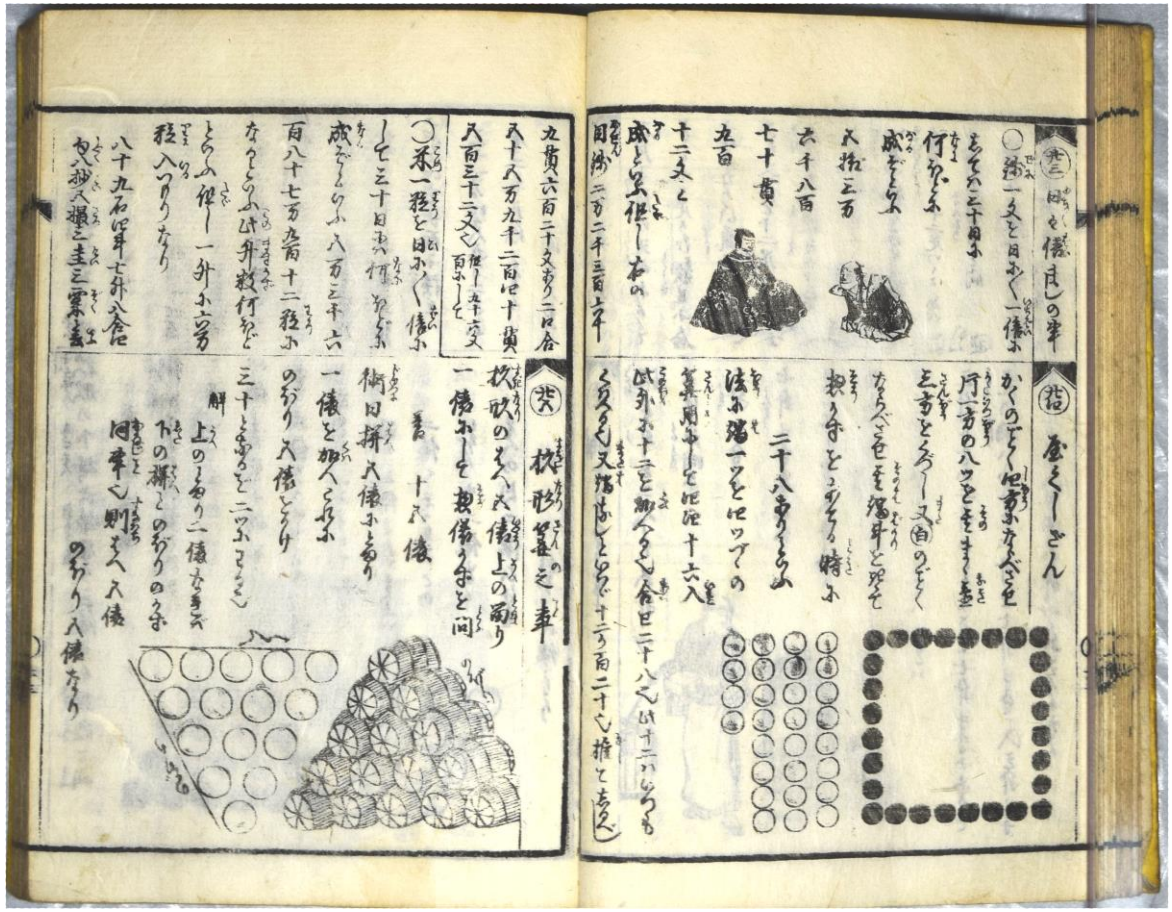
「塵劫記」は寛永４年（１６２７年）に初版が発行された算書である。和算書が流行すると日本各地で大変な人気となり、その名が付いた様々な書籍が多数出版された。本史料は安政２年（１８５５年）に作成されたもので、初版から何度も改良が重ねられており、内容や構成が比較的充実、また変化している。

次に、本史料の具体的な内容について解説する。

序盤は、数字や単位の解説、九九などの基礎があげられている。

続いて、日常で使用する掛け算や金の両替、利息計算等の解説がある。例題が豊富なので応用しやすく、生活や仕事に必要な算術は全て学ぶことができる。

さらに、平方根・立方根の求め方等の発展的な問題も掲載されていて、すでに算術を一通り学んだ大人も、趣味や娯楽として楽しめる内容となっている。

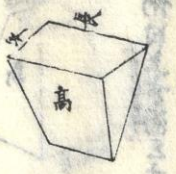


今如第方錐あり面幸高七寸積と問

答 積八十四歩

術曰面幸をとり合る七寸をとり錐法三をかけるなり

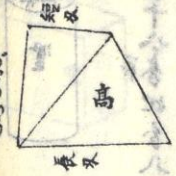
今如第矩形あり長一丈二寸平七寸及六寸高八寸



答 積二百八十歩

術曰長一丈二寸と倩て又六寸と加へ平七寸をとり又高八寸をとり法六をかけとり積を好るなり

今如第両及矩あり岳及一丈二寸縱及六寸高七寸



答 積千百八十六歩

術曰長及一丈二寸へ縱及六寸をとり合る二丈七寸をとり法六をとりとり積を好るなり

今如第四錐あり径六寸高七寸は積をとる

答 積六十八歩九分七三六

術曰径六寸をとり合る七寸をとり円積率七八六四をとり錐法三をかけとり積をとる

今如第圓臺あり上径七寸下径八寸高一丈二寸は積を求む

答 積八百三十歩九三〇四

術曰上径七寸へ下径八寸をとり別ふ之上径七寸へ下径八寸加へ一丈八寸をとり合円別を数とり積へ一丈二寸をとり円積率七八六四をとり法三をかけとり積を好るなり

今如第球あり径十七寸は積を問

答 積二千八百七十二歩四四六八

【翻刻文】（一枚目）

【二十三　日々倍ましの事】

○銭一文を日にく一倍に
して八三十日に
何ほどに
成ぞといふ
五拾三万
六千八百
七十貫
九百
十二文と
成といふ但し右の
目銭二万二千三百六十
九貫六百二十文あり二口合
五十五万九千二百四十貫
五百三十二文也　但し九十六文
百にして
○米一粒を日にく倍に
して三十日に八何ほどに
成ぞといふ五万三千六
百八十七万九百十二粒に
なるといふ此升数何ほど
といふ但し一升に六万
粒入つもりなり
八十九石四斗七升八合四
勺八抄五撮三圭三粟と云

【二十四　やくしざん】

かくのごとく四方にならべさせ
片一方の八ツを其まゝ置
三方をくづし又㊀のごとく
ならべさせ其端斗をきゝて
惣かずをあてる時に
二十八ありといふ
法に端一ツを四ツづゝの
算用にして四四十六入
此外に十二を加へる也合せ二十八也
此十二ハいつも
くハへる也又端なしといハゞ十二か
百二十也推てしるべし

【二十五　杉形算之事】

杉形のはへ五俵上の留り
一俵にして惣俵かずを問
答十五俵
術　曰挿五俵にとまり
一俵を加へこれに
のぼり五俵をかけ
三十となるを二ツにわる也
解　上のとまり一俵なれバ
下の挿をのぼりのかず
同事也　則　はへ五俵
のぼり五俵なり

デジタル資料室　萬代塵劫記

（二枚目）

今如図方錐あり面六寸高さ七寸積を問

答　積八十四歩

術曰面六寸をかけ合し高七寸をかけ錐法三を以わるなり

今如図害木形あり長一尺二寸平七寸刃六寸高八寸

此積をとふ

答　積二百八十歩

術曰長一尺二寸を倍して刃六寸を加へ平七寸をかけ

又高八寸をかけ定法六を以わり積を得るなり

今如図両刃樝害あり長刃一尺二寸短刃九寸高二尺七寸

此積をとふ

答　積四百八十六歩

術曰長刃一尺二寸へ短刃九寸をかけ高二尺七寸を

かけ定法六をもつてわり積を得る也

今如図円錐あり径六寸高七寸此積をとふ

答　積六十五歩九分七三六

術曰径六寸をかけ合高七寸をかけ円積率七八五四

をかけ錐法三を以わり積をうる也

今如図圓台あり上径七寸下径八寸高一尺二寸此積

をとふ

答　積五百三十歩九三〇四

術曰上径七寸へ下径八寸をかけ別に置上径七寸へ

下径八寸加へ一尺五寸を得是をかけ合内別置数を引残へ高一尺二寸

をかけ円積率七八五四をかけ定法三を以てわり積を得る也

今如図　球　あり径十七寸此積を問

答　積二千五百七十二歩四四六八

デジタル資料室　萬代塵劫記